Osaka Shoin Women's University Repository

『後拾遺集』巻六「冬」評釈（四）

安田純生

永承四年内裏の歌合に初雪をよめる　相模

都にも初雪ふれば小野山の真木の炭がまたきまさるらむ

〔大意〕都にも初雪がふっているので、小野山の真木を焼く炭がまは、いっそうどんどんたいているだろう。

〔鑑賞〕雪を主題とする十七首の最初の歌である。『後拾遺集』でも、冬歌の中では、雪を詠んだ作がもっとも多い。それらを副主題によって分けると、初雪一首、埋火一首、あわ雪一首、山の雪三首、旅の雪三首、山里の雪五首、雑の雪三首となる。

この相模の一首は、詞書にあるとおり、永承四年十一月九日に開催された「内裏歌合」の八番右に出詠されたものである。左は、式部大輔の「梅が枝のまだ咲かなくに散る花は今朝はつ雪のふりかかるらむ」で、判者の源俊房は、相模の歌を勝とした。式部大輔の歌は、常套的な発想ではあるが、「初雪」という歌題を正面から捉えている。それに対し、相模は、都にふる初雪を契機として寒さのきびしい小野山での生活を思いやったわけで、炭がまを主題とする作ともとれるような一面がある。炭がまが「たきまさる」のは、炭の需要がふえるためではあるまい。前に述べた和泉式部の歌に「寂しさに煙をだにもたじとて柴をりくぶる冬の山里」とあるごとく、山の寂しさを耐えしのぶためであろうし、寒さをしのぐためでもあろう。また、都に初雪がふる以上は、小野山にも、当然、雪がふっていると解した方がいい。都の初雪を契機に山を思いやった先例には、源景明の「都にてめづらしとみる初雪は吉野の山にふりやしぬらん」（『拾遺集』巻四）があった。初雪ではないが、曽禰好忠の「都にも道ふみまよふ雪なればとふ人あらじみ山べの里」（『好忠集』）も、類想の一首である。相模は、おそらく、これら二首を意識していたのであろう。

『後拾遺抄註』は、「ヲノヤマハ小野ノ山也。マキノスミガマハ、真木ヲヤクスミガマ也」と注し、好忠の「み山木を朝な夕なにこりつみて寒さを恋ふる小野の炭やき」を引く。顕昭は、小野の炭やきを詠んだ先例として、好忠の作を掲げたのであろう。実際、相模の

Osaka Shoin Women's University Repository

歌以前に小野の炭やきを詠んだ歌は、好忠の作以外に見あたらないようである。とすれば、相模は、好忠の作を典拠に小野山の炭やきを歌った、と考えてよかろう。相模は、なぜかこの歌枕を好んだらしく、『相模集』には、

あさげして出でつる妹をまつ程になげきこりつむ小野の炭やき

このごろは小野のわたりに急ぐらむ冬まちがほに見えし炭やき

といった歌も見える。

ともあれ、好忠から大きな影響を受けている作品である。

埋火をよめる　素意法師

うづみ火のあたりは春の心地してちりくる雪を花とこそ見れ

〔大意〕暖かい埋火のあたりは春のような心地がして、散ってくる雪を花と見ることだ。

〔鑑賞〕『後拾遺集』の配列の上では、埋火を副主題とした雪の歌といえる。が、内容的には埋火を主題とした一首である。主題・副主題のいずれにしても、埋火の歌を撰入した勅撰集は、『後拾遺集』を嚆矢とする。しかし、素意法師の時代には、素材としても珍しいとまではいえない。『和漢朗詠集』巻上に「埋火のしたにこがれしときよりもかくにくまるる折ぞわびしき」が収められているし、他に、

埋火の下にうき身となげきつつはかなく消えむことをしぞ思ふ　（『好忠集』）

うづみ火の近き限りは桜ばな散るともちりはたてじとぞ思ふ　（『道命阿闍梨集』）

埋火にあらぬわが身も冬の夜におきながらこそ下にこがるれ　（『相模集』）

ぬる人をおこすともなき埋火を見つつはかなくあかす夜な夜な　（『和泉式部集正集』）

夜もすがらわが枕なるうづみ火の下にくゆるをよそにやはみる　（『能因集』）

埋火のいきてうれしと思ふにはわがふところに抱きてぞぬる　（『落窪物語』）

なども、素意以前にあった。ただ、それらの先例は、和泉式部の作を除いて、埋火自体を歌ったものとはいえない。その意味では、素意の埋火の歌はまだまだ新鮮であったはずである。

『後拾遺抄註』は、菅原道真の詩の一節、「コノ火ハ花樹ヲ鑽ツテ取レルナルベシ。対ヒ来ツテハ夜モスガラ春ノ情アリ」をあげ、「同心歟」と注しており、『八代集抄』も、それを踏襲する。『和漢朗詠集』にも収められている詩であるので、素意の意識にあったことは十分に想像される。もっとも、道真は火と花樹とを、素意は雪と花とを結びつけているのであって、異なる面も大きい。雪を花に見立てるのは、もちろん、伝統的な技法であり、結句を「花とこそ見れ」とした先例に限っても、

白雪のところもわかずふりしけばいはほにも咲く花とこそ見れ　（『古今集』巻六　紀秋岑）

年ふれど色もかはらぬ松が枝にかかれる雪を花とこそ見れ

Osaka Shoin Women's University Repository

（『後撰集』巻八　読人不知）

霜がれの枝となわびそ白雪の消えぬ限りは花とこそ見れ

（『後撰集』巻八　読人不知）

わが宿の梅にならひてみ吉野の山の雪をも花とこそ見れ

（『拾遺集』巻一　読人不知）

などがあげられる。素意のいう「花」は、梅ととっても桜ととってもよさそうである。雪が「ちりくる」としたのは、「花」と関連づけるためであり、雪が家の中へふり込んでくる情況をいっているのであろう。そしてその家は、雪がふり込んでくるほどの粗末な山里の草庵と理解したい。

雪を主題とする歌群の最初に、初雪の歌を置いたのは当然としても、続いて埋火の歌を配列したのは、藤本一恵氏がいわれるように、(2)炭がまと埋火との間に共通する性格を認めたからであろう。

染殿の式部卿のみこの家にて、松のうへの雪といふ心を人々よみ侍りけるによめる　藤原国行

あわ雪も松の上にしふりぬれば久しく消えぬものにぞありける

〔大意〕すぐに消えるはずの泡雪も、千歳の齢を保つ松の上にふりつもったので、永いあいだ消えないものであったよ。

〔鑑賞〕泡雪を副主題とする一首である。泡雪は、「かつ消えて空にみだるるあわ雪はもの思ふ人の心なりけり」（『後撰集』巻八　藤原蔭基）によっても知られるように、消えやすい雪である。それが、松の齢にあやかり、いっこうに消えないというのである。『八代集抄』に「式部卿のみこの家にて祝儀を読るにや」とあるとおり、皇子の長寿を予祝した歌で、内容的には賀歌といえる。染殿の式部卿と称された皇子は、『本朝皇胤紹運録』によれば、寛弘七年十月十日に薨じた為平親王であるという。『頼宗集』所収の、

松上雪

いかばかり世々をへにける松なれば雪をいただく程になるらん

も、あるいは同一の歌会での作であろうか。

松につもった雪は、屏風絵の画題ともなっており、それを詠んだ歌や詩も多い。たとえば、

松の上にふり覆ふ雪は葦たづの千代のゆかりにきるとぞ見る

（『古今六帖』第一　作者未詳）

年ふれど色もかはらぬ松が枝にかかれる雪を花とこそ見れ

（『後撰集』巻八　読人不知）

見わたせば松の葉しろき吉野山いくよをつめる雪にかあるらむ

（『拾遺集』巻四　平兼盛）

松の上にふる白雪のかつ消えて千代は隠れぬものにぞありける

（『道済集』）

などが賀歌の例である。ただ、雪の消えがたい旨をいった先例は見出せない。とはいえ、

松風の吹かんかぎりはうちはへて絶ゆべくもあらず咲ける藤波

（『貫之集』）

もろともに千代は咲きなむ藤の花松にかかれる春しなければ

（『元真集』）

Osaka Shoin Women's University Repository

などと、松にあやかって千代の命を得る藤の花を歌った作があり、発想が似ている。藤を雪に変えれば、国行の歌となるわけである。そこにいささかの工夫があったにせよ、型にはまった観のあることは否定できない。

隆経の朝臣甲斐守にて侍りける時、たよりにつけてつかはしける　紀伊式部

いづかたと甲斐の白嶺は知らねども雪ふるごとに思ひこそやれ

〔大意〕どちらの方に甲斐の白嶺があるとは知らないけれども、雪がふるたびに白嶺を、すなわちあなたを思いやっていることだ。

〔鑑賞〕山の雪を副主題とする三首のうちの一首である。これは山の雪を想像した歌であるが、二首目は山の初冠雪の歌、三首目は山にふりつもった雪の歌である。

藤原隆経が甲斐守であった時期はよくわからず、したがって、この歌の詠作年時も不明である。しかし、曽禰好忠の「ここにだにかばかり凍る年なれば甲斐のしらねを思ひこそやれ」(『好忠集』)に先行することはあるまい。つまり、紀伊式部は、好忠の作を学んで、甲斐の白嶺を思いやると歌ったのである。甲斐の白嶺につき、『後拾遺抄註』には、「古今ニヨメルカヒガネト云山也。雪イタウフル山ナレバ、シラネト云也。カヒガネト云風俗ニ、カヒガネノシロキハユキカトウタヘル、是也」とある。雪の深い山と考えられていたらしく、それ故に、雪のふるたびに思いやるのである。「白嶺」は、思いやる対象であるとともに、「知らねども」を導く序詞的要素を持っている。似た表現は、早く、『万葉集』の「み吉野のたきの白波しらねども語りしつげばむかしおもほゆ」(巻三　土理宣令)が見られ、平安朝に入っても、

君がゆく越のしら山しらねども雪のまにまにあとは尋ねん
(『古今集』巻八　藤原兼輔)

思ひやる越のしら山しらねども一夜も夢にこえぬ夜ぞなき
(『古今集』巻十八　紀貫之)

音ばかりおつる白川しらねどもかはづが声をとめてきにけり
(『古今六帖』第三　作者未詳)

などと例が多い。特に、白山を詠んだ『古今集』の二首が紀伊式部の念頭にあったことは、明らかである。ただし、『古今集』の二首は、山に人が喩えられてはおらず、その点は紀伊式部の作と相違する。

古歌によりかかった素朴な作品で、特色のあるものではないが、遠く甲斐国まで出かけて行った者に贈る挨拶の歌としてよく出来ている、とは評せよう。これをもらった隆経も、大いに喜んだに違いない。もともとは、隆経の返歌も存したのであろう。

山の雪をよみ侍りにける　能因法師

もみぢゆゑ心のうちにしめゆひし山の高嶺は雪ふりにけり

〔大意〕紅葉の美しさ故に、自分だけのものと思って心のうちに標を結んだ山の高嶺に雪がふったことだ。

〔鑑賞〕『能因法師集』によれば、「望山雪」との歌題にもとづく

Osaka Shoin Women's University Repository

は、思いやる対象であるとともに、「知らねども」を導く序詞的要

〔鑑賞〕『能因法師集』によれば、「望山雪」との歌題にもとづく

白雲の上よりみゆるあしひきの山の高ねやみさかなるらむ

あしひきの山の高嶺にのぼりてぞえなつの海は近く見えけり

も収められており、少なくとも、能因自身はこの詞句を好んでいたようである。

題しらず　　源　道済

朝ぼらけ雪ふる空を見わたせば山のはごとに月ぞ残れる

〔大意〕朝ぼらけに雪のふる空を見わたすと、山には雪がつもり、山の端ごとに月が残っているように思われる。

〔鑑賞〕山の端に残る雪を月と見た歌である。「暁梁王ノ苑ニ入レバ、雪群山ニ満テリ」（『和漢朗詠集』巻上）を想起させるものがある。雪は、現在もふり続け、山の上部だけにはつもってもいるのであろう。雪を月と見た先例および同時代の作には、

朝ぼらけありあけの月と見るまでに吉野の里にふれる白雪

（『古今集』巻六　坂上是則）

夜ならば月とぞ見ましわが宿の庭しろたへにふりつもる雪

（『後撰集』巻八　読人不知）

うばたまの夜のみふれる白雪はてる月影のつもるなりけり

（『後撰集』巻八　読人不知）

天の原かきくらがりて降る雪を夜目にはあかき月かとぞ見る

（『和泉式部集正集』）

などがあった。直接的には、『八代集抄』に「心は明也。古今、有明の月と見るまでにとよめる雪の俤をうつして、山の端ごとにと風

歌であり、同集の所収位置から長久二年ごろの作と知られる。

源経信が『難後拾遺』で「しめゆふとはなにごとにかあらん」と指摘したごとく、上三句が少々難解である。『八代集抄』は、「心の中にしめゆひしとは、紅葉見んと心に期し置し心也」とする。これはおそらく、『拾遺集』巻九所収の「山たかみ夕日がくれのあさぢ原のち見むためにしめ結はましを」（柿本人麿）あたりをもとにした解であろうが、「心に期し置し」ばかりで、実際には紅葉を見なかったというのであろうか。どうもわかりにくい。『万葉集』巻二十には「はふ葛のたえずしのばむおほきみのめしし野べにはしめ結ふべしも」があり、『狭衣物語』巻三には「心にはしめ結ひおきし萩が花しがらみかくる鹿やなくらん」があって、心のうちに標を結うとは、紅葉が美しいのでいつまでも自分のものにしていたい、との気持を表しているようである。そして、雪によって、その心のうちの標が無視されてしまったのである。もっとも、無視されたことを単に残念がっているのではなく、残念と思いながらも、雪の美しさをもまた認めているのである。その点は、「折に付たる気色の捨がたき心なるべし」との『八代集抄』の解はあたっていよう。

「山の高嶺は」とあるから、高嶺だけが白いのであって、平野部はもちろん、低い山には雪がつもっていないのであろう。それにしても、「山の高嶺は」という詞句は、山と嶺とが重複しており、まずい表現のようにも思える。しかし、『道命阿闍梨集』に「雪きえぬ山の高嶺にすむ人は都の花を何と見るらむ」があるほか、『能因法師集』には、

Osaka Shoin Women's University Repository

情をかへてめづらかに侍にや」とあるように、坂上是則の作を踏まえたと考えられる。確かに、「朝ぼらけ」に月が「山のはごとに」残るとしたところは、面白いといえば面白い。作者もそこが得意なところであろうが、作意があらわに過ぎて、わざとらしい感じもする。

『道済集』所収の同歌の詞書は、単に「雪」と記されているだけである。前の歌の詞書「蔵人に、少（中イ）納言の君の御もとにて、歌合に、はるまつこころ」がこの歌にもかかるとすれば、歌合における作となる。道済が蔵人であったのは、長保三年正月から寛弘三年までの期間であろう。『後拾遺集』で「題しらず」となっているのは、撰者の通俊が、前の歌の詞書がこの歌にもかかると考えなかったせいかもしれない。

こし道も見えず雪こそ降りにけれ今やとくると人は待つらむ　　慶尋法師

〔大意〕やって来た道も見えないほどに雪がふりつもった。しかし知人は、今にも雪がとけて私が帰ってくると思い、待っているだろう。

〔鑑賞〕この歌は、山の雪の歌と旅の雪との中間に置かれており、いずれにも受けとれるような内容でもある。もっとも、山を表わす言葉はひとつもないし、題しらずのため詠作事情も不明である。しかし、当時の読者は、たとえば壬生忠岑の「み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ」（『古今集』巻六）と同じく、修行のために山へ入った人を想起したのではないか。それで、山の雪の歌のすぐ後に配列されたのであろう。忠岑の作は、待つ人の側の歌であるが、慶尋の作は、冬山の草庵に籠る修行者の側の歌である。具体的には、吉野山あたりに籠る修行者を思い描けばいいのであろう。山もしくは山里の道が雪によって閉される由をいった歌は、

山里は雪ふりつみて道もなし今日こむ人をあはれとはみむ　（『拾遺集』巻四　平兼盛）

あしひきの山路も知らず白かしの枝にも葉にも雪のふれれば　（『古今六帖』第一　作者未詳）

冬ごもり人も通はぬ山里のまれの細道ふたぐ雪かも　（『加茂保憲女集』）

都にはふりやしぬらむ山里の道もなきまでつもる白雪　（『道済集』）

道もなく雪ふりにけり山里はただ山彦のこたへのみして　（『道済集』）

むかし見し友をたづぬと山里にきたる道だに見えぬ雪かな　（『経衡集』）

などと例が多い。

現実には、知人が待ってくれているかどうかはわからない。それを「待つらむ」といったところに、山住みの修行者の寂しさと人恋しさとが看取できる。一見、何でもないような平明な表現でありながら、物語的なふくらみをも有している。慶尋の体験にもとづく歌

Osaka Shoin Women's University Repository

かどうかはともかく、法師の「題しらず」の作となっている点が意味ありげである。撰者は、体験にもとづく歌として読みとってほしかったとも推測される。

『八代集抄』は、「帰るべきかたなく降つもる雪に、今やかへりくると人は待らんと也。とくるに来を添て也」と注する。つまり、「とくる」には、雪がとける意と帰り来る意が懸けられているというのである。首肯すべきであろう。

注

（1）川口久雄全訳注『和漢朗詠集』（講談社学術文庫、昭57・2）の本文による。『和漢朗詠集』からの引用は、以下同じ。

（2）『後拾遺和歌集㈠』（講談社学術文庫、昭58・5）